

博報財団 第11回「国際日本研究フェローシップ」成果報告書

I. 研究成果概要

氏名	葛 茜(カツ アカネ)
在住国名	中国
所属・役職	福州大学外国語学院日本語学科・准教授
招聘回(招聘研究期間)	第11回(2016年9月1日～2017年8月30日)
受入機関	京都大学 大学院人間・環境学研究科
招聘研究テーマ	中国人日本語学習者の文化的アイデンティティに関する研究 — 中国人留学生と中国本国の日本語専攻生との比較を通して —
研究目的	本研究は中国の大学で専攻として日本語を学ぶ学習者と、日本に留学中の元日本語専攻生を対象に、中国と日本の文化間移動によって起こった文化的アイデンティティの揺らぎや変容に注目し、それと日本語を学ぶ経験との関係を探ってみるものである。人間育成の視点から、今後中国の大学における日本語専攻教育は何を目指すべきかを検討する。具体的に下記の三つの研究課題を明らかにすることを目的とする。 ①日本に留学中の元日本語専攻生と中国本国で在学中の日本語専攻生が持つ文化的アイデンティティの相違。 ②日本での留学や生活などの経験は日本語専攻生の文化的アイデンティティの形成にどのような影響を与えたのか。 ③日本語専攻生は自らの日本語を学ぶ経験をどのように認識しているのか。

研究成果概要:

本研究はライフストーリー研究法を用いた。調査協力者は中国の大学で在籍中の日本語専攻生10名と日本に留学中の元日本語専攻生10名である。インタビュー調査から得たデータを文字おこし、三つの時期(日本語を学ぶ前/日本語専攻生時期/留学生時期)に分け、中国・日本に対する認識、自己概念、帰属意識、日本語を学ぶことの意味を中心にまとめた。

1. 調査データから以下のことがわかった。

日本語を学ぶ前、日本語専攻生は中国の過去の栄光、中国人としての誇りをもち、中国の被侵略と敗戦の近現代史、抗日戦争史に強く印象を受けた。礼儀正しい日本人や先進国などの対日認識を持ち、日本の大衆文化への親近感も示された。一部の日本軍国主義と一般人民を区別した「二分論」を認識し、「日中友好」擁護と「軍国主義復活」批判の並存がみられた。日本語専攻生時期においては、日本人教師によって、真面目で勤勉、日中友好の担い手などの肯定的な日本人イメージを具現化された。日本語授業、日本語教科書、日本大衆文化を通して日本に対する文化的アイデンティティを構築しつつ、自国文化、歴史教育への疑問と批判を芽生えた。留学生時期においては、多様な日本人から一人の人間としての日本人への認識の変容がみられ、日本・日本人に対する偏見や先入観を徐々に取り除きながら、「同化なき適応」を選ぶ傾向がみられ。一方、中国人としての部分を大切にしたい気持ちが強く、日中関係について再認識しながら国際視野を育成している。日本語を学ぶことは、いろいろな声や考え方や人の存在をわかる契機になり、日本語専攻生は先入観をなくしてクリティカルに思考することの大切さに気づき、人生観、価値観、世界観が変わった。

2. 上記の分析から、「文化的アイデンティティの形成に寄与したもの」、「国民アイデンティティと国際人アイデンティティの間」、「再び中国の大学日本語専攻教育を考える」といった三つの視点から考察した。

①日本語を学ぶ前、日本語専攻生は自国文化に対する文化的アイデンティティを真剣に模索し思考したことがなく、

無意識に、無批判的に受け入れさせられた状態にあった。日本語を学び、日本文化を学習、理解する過程のなか、自国文化と日本文化に対する先入観や偏見などが是正され、考えさせられていた。日本に対する文化的アイデンティティが形成、変容する過程は、自国文化に対する文化的アイデンティティの根源を真剣に内省・模索する過程でもある。異文化の積極的受容と自文化の保持の両面が強化され、そうした態度が異文化適応を順調に促進していた。

②日本語専攻生は、「選び取られた栄光」と「選び取られたトラウマ」の国民アイデンティティを持っている。日本語を学ぶことによって文化間移動ができ、「第二次社会化」(学校教育)で構築された国民アイデンティティの排他的性質に気づき、「中華思想」、「自民族中心主義」、日本に対する先入観や偏見を解体し、物事を多角的に解釈し歴史的記憶を再構築しはじめた。中国の愛国主義教育は、「中華民族」国家としての凝集力を高め、さらなる発展を国家目標に据えた国家形成を求めるものであり、必ずしも対日関係改善を意図して示されたものではない。しかし、日本・日本人に関する情報や中国人の対日感情は、反日一色で塗り固められるものではないし、愛国主義教育は反日教育ではない。

③中国の日本語教育の現場では、文化や異文化理解の教育は依然として文化の「異」に注目し、二項対立、ステレオタイプ的な文化思考様式を学習者に教え込み、文化教育の罫から脱出できてきない現状である。それは、文化教育が言語教育に付随するもの、文化を所産・知識として捉え、均質的で静態的な文化概念の存在に起因すると考えられる。国民アイデンティティを強化し、国民の育成やイデオロギーの付与を依然として強調する中国の大学教育のコンテキストにおいて、「第三次社会化」を促す外国語教育(日本語専攻教育)しか担えない役割を真剣に検討すべきである。また、複雑な感情を絡み、さまざまな負と正の遺産を継承し、対抗や紛争を繰り返す中国と日本であるからこそ、日本語教育が担う役割、目的がさらに試され、問われつづけるだろう。今後の日本語専攻教育の在り方を検討するには、本研究で明らかになったように、人間育成、外国語教育の政治的な側面からの視点は不可欠であろう。

掲載論文:

- ①葛茜(2017a)「中国人日本語専攻生の文化的アイデンティティと日本語を学ぶことの意義——留学中の元日本語専攻生のライフストーリーから——」『日本語・日本学研究』第7号 東京外国語大学国際日本研究センター pp.85-95
- ②葛茜(2017b)「中国の大学日本語専攻教育における『学習共同体』に関する一考察」『日本研究教育年報』第21号 東京外国語大学日本専攻 pp.91-101

口頭研究発表:

- ①「新華僑である親は子どものことばの学びをどのように捉えているか」「子どもの日本語教育研究会」第1回研究会(2016.12.4 京都教育大学)
- ②「中国系ニューカマー二世世代のトランスナショナルな移動とアイデンティティ」(2017.7.14 大阪大学言語文化研究科真嶋潤子教授ゼミ)
- ③「中国の大学日本語専攻教育における教育理念の意味づけと問題点」(2016.10.7)／「中国人日本語専攻生の文化的アイデンティティと日本語を学ぶことの意義——留学中の元日本語専攻生のライフストーリーから——」(2017.1.27)／「中国系ニューカマー二世世代のトランスナショナルな移動とアイデンティティ」(2017.6.30)／「中国人日本語学習者の文化的アイデンティティの形成に関する研究」(2017.7.21 京都大学大学院人間・環境学研究科西山教行教授ゼミ)

展望:

1. 研究の継続:引き続き関連論文を執筆し投稿する。また、競争的科学研究費を申請する予定である。
2. 一年間蓄積した理論的枠組み、研究手法を活用し、今後研究の視野を拡大し、言語教育政策研究、中国系移民のアイデンティティと言語習得研究に展開したい。